

目が覚めると真っ暗だった。一瞬何処にいるのか判らなかつたが、そこは亜丁村で泊まっていた宿の座敷牢のように窓の無い部屋の中なのだった。

穴倉から這い出すような気分で表に出ると太陽はすでに空高く昇り、昨夜の雨はすっかり晴れあがって穏やかなお天気だ。久しぶりに何の予定もないのんびりとした朝だ。宿のおじさんをお願いして何本かの魔法瓶にためてあったお湯をもらい、庭先で5日ぶりに髪を洗った。

この辺りの地方では頻繁に入浴する習慣は無いので村人達もそれなりの容姿であつたし、高度が高いために気温が低く空気も乾いていて、何日も入浴していない事も然程苦痛ではなかつたが、毎日の登山で汗をかき、廃屋で眠り、ホコリにまみれた頭に雨が当たって数本の束に固まりかけていた髪の毛が再びサラサラに戻るのなんて気持ちがいいんだろう。

髪を洗った後、お湯に浸したタオルで身体を拭いてすっかりサッパリとした気分になり、濡れた髪を太陽の光に当てて乾かしながらのんびりとしていると、慌ただしかつた昨日一日の出来事がまるでまぼろしのように思えてくる。

庭先で作業していた宿の主人が「もうすぐホーフウが来るから見にいくと良いよ」と声をかけてくれた。

ホーフウって何だろう？

言葉で尋ねてもなんだか良く判らなかつたので、手帳とペンを渡し漢字で書いてもらおうと主人はそこに「活佛」と書きこんだ。なるほど～！生き仏！！それは行ってみなくっちゃ！！

宿の敷地を出て村の目抜き通りに行ってみると、道路の両脇には既に大勢の村人達が群がっていた。男衆は働きに出ているのか、その場に集まっているのは主に老婆や女達と子供達だったが、手に手にお金やお菓子やお米や麦の穂や、その他色々なお供え物を携えて活佛が来るのを待っていた。この地方の「活佛」ってどんなものだろう。

生き仏といえば、私にとっては初めての外国であるネパールで「クマリ」と呼ばれる少女の生き神様を見た事がある。神となる者として様々な条件を満たし、ヒンドゥー教の儀式に則って選び出された幼い少女は、クマリと呼ばれる生き神様となり、人々から絶大な信仰を集め、国王でさえその足元に跪くのだという。通常は館に閉じこもって暮らしているためクマリがその姿を人に見せる事はめつたに無いが、1年に1度行われる大祭「インドラ・ジャトラ」の祭りの時だけは山車に乗って町中を練り歩く。

クマリの姿を見た者には幸せが訪れるといわれ、私が

ネパールを訪れていた祭りの日、人々は一目クマリの姿を見ようと、その姿を求めて沿道を埋め尽くし熱狂していたものだった。

その日の亜丁村の様子は特に祭り事が行われている雰囲気ではなかつたし、村が小さい為に集まっている人数もそれなりだったが、その場に集まっている村人達の熱気は十分に伝わってきて私も何が起こるのかとワクワクした気分になっていた。

そんな時である。活佛はなかなか来なかつたが、皆が活佛の訪れを待っている道の向こうから、これから亜丁自然保護区に向かうのであろう西洋人観光客を乗せた車が数台、砂埃をあげながらやって来た。沿道に集まっていた亜丁村の女性達の多くは伝統的なチベット服を纏っており、そんな村人が手に手にお供えをもって道路に集結している姿は観光客にとって、さぞ絶好の被写体であつたのだろう。西洋人達は大喜びで歓声を上げ、それぞれ車から身を乗り出すようにして、バシャバシャと写真を撮りまくりながらホコリを巻き上げ走り去って行った。彼らにとっては思いがけずに出会った興味深い村の風景となるのだろうが、私は走り去った車の残した砂埃にむせながらすっかり嫌な気分だった。

「ふん！！見世物じゃないよ！！」

だが改めて思い直せば、私は間違いなく写真を撮りまくりながら走り去っていった西洋人達と同じ立場なのだ。まったく己の自分勝手さには呆れてしまう。だが、自分がこの村人であつたなら・・・と想像すれば、金銭欲を別にしても村人達があのようによくやってくるよそ者に対し、少しでも金を取ってやろうという気持ちになってくるのが理解できるような気がした。

そんな事を思っているうちにいよいよ本物の活佛達がやってきた。

「活佛」という言葉と、信仰心の深い村人達の待ち焦がれる様子から、私はネパールの祭りでクマリの山車が街を練り歩いてきた時のように、宗教上の行列が鐘や太鼓などを鳴らしながらやってきて、お付の者に傘など差し掛けられながら托鉢の鉢を抱えた高僧が厳かに歩いてくるような情景を想像していたのだが、待ちに待った活佛は先程の西洋人達と同じ様に、やはり数台の自動車に乗り砂埃を巻き上げながらやってきたのだった。

車の中に座っている僧侶達は、私の目にはどうも生き仏というよりは普通のお坊さんに見えたが、村人達は熱狂し

て車に押し寄せた。しかし活佛達の目的はあきらかに亜丁村には無い様子で、車に群がる村人を振り払うように車は走り過ぎて行ってしまった。

窓に駆けよる村人に申し訳のように活佛が差し出した手にお供えを渡せた幸運な者はごく僅かで、車の窓から強引にお供えを投げ込む者もいたが、活佛達は元々そんな村人達のささやかなお供え者には興味が無いようで、私が見たところではどうもありがた迷惑な様子なのだ。車に群がる村人達を蹴散らすように村を通り抜けた活佛達が、まったく通行の邪魔だと苦笑しあってる様子が目に浮かんだ。私の隣にいた老婆は、大事に捧げ持っていたお米を渡すこともできず、呆けたような顔をしてその場に立ち尽くしていたが、じきに肩を落として家に戻っていった。

あの活佛達は何処からやってきたのだろうか？恰幅も良く裕福そうな雰囲気伝わってきたところをみるとどこか有名なお寺の僧侶なのだろうが、今のご時世でお坊さんが儲かるのは日本もチベットも変わらないようだ。亜丁村など人が集まっているといってもたかが知れた人数だ。こんなに信仰して待っている村人達のために、せめて形だけでもお布施を受け取りその者に功德が得られるようなおまじないでもかけてあげて欲しかった。

活佛達の車がすべて走り去ってしまうと、それまで集まっていた村人達も三々五々散ってしまい、活気づいていた村は閑散とした様子になってしまった。私もちょっぴり拍子抜けしたような気分になったが、それでも村人達の信仰心の厚さをこのような形で垣間見る事ができたのは興味深く良い経験だ。

急に手持ちぶさたな気分になってしまった私は、とりあえず亜丁村を散歩する事にした。昨日は村に着いてすぐに少年に出会ってしまったので村の様子はまだ殆ど見ていない。

亜丁村はなだらかな山の斜面に畑を作り、数少ない民家が寄り添いあって建っているだけの小さな村だ。石作りの民家や黄金色に麦の波打つ畑を見ながら村の中央を突っきって走っている道路を登ってゆくと丁度村はずれにあたる斜面の中腹に大きな石があり、その場所から村全体を見下ろす事ができた。いったい何軒家が在るんだろうと村の上空からざっと数えてみても、建物の数はせいぜい20軒程だった。正面の上空には雲がかかっていたが、きっとこの雲が晴れていれば、村を見下ろすようにドーンと万年雪を頂く神の山、仙乃日がそびえている筈だ。

もし、私がこの村の住人だったら、何か悲しい事があった時はきっとここに登ってきて泣くんだろうな……。そんな事を思いながら、今度は今まで登ってきた道を逆に下り始めた。すぐに私の泊まっている宿の前に辿り着き、そ

の前を素通りしてもう少し下れば昨日訪れた少年の家だ。彼の家は殆ど村のはずれにあり、その下には小学校があって村は終わりだった。村の端から端まで歩いて、あっという間だ。

子供達が小さな自転車で遊んでいたのが仲間に入ろうと「私にもやらせて!!」と自転車に跨り坂を下ると、ブレーキが壊れかけていでけっこう怖い。「きゃー!!」と声を上げながら坂道を自転車で転がり降りて戻ってくると、小さな子供達が口々に「1元だよ、1元」とお金をせがんでくるのにはビックリした。

あーあー、まったくこの村は!!辟易した気分の子供達を振り切り宿まで戻ると、何だかもうやる事が無い。宿にいても仕方が無いので再び散歩に出ると先程は気付かなかった、おみやげ物屋のような店を見つけた。亜丁を訪れる旅行者はその殆どが亜丁村を素通りして自然保護区まで行ってしまふ筈だ。訪れる観光客も少ないこんな小さな村で商売が成り立つのだろうか？

店の中には手作りのアクセサリーとアンティークな装飾品と見られる品物が並べられていた。亜丁村に来られた記念に何か購入しても良いなと思ひ商品を眺めてみたが、どうも買いたくなるような品物は見つからない。しばらく見ていると奥から若い男性が出てきて声をかけて来た。

暇を持て余していた私はこれ幸いと話し相手が見つかった喜びを態度に表すと、話相手が欲しかったのは私だけではなかったらしく、青年に椅子に座るように勧められた。低い声でつぶやくように喋る少し変わった雰囲気この青年は、亜丁の人間では無いそうで、自身を漂泊の旅人のようなものであると私に告げると、私が村人達との筆談用にと手に持っていた手帳を取りあげ、空いているページに自己紹介のような文章を端正な字で書き記してみせた。余白には『オン マニ ベネ ホン』というチベット族の祈りの言葉が美しくデザインされたチベット文字で書き入れられている。

店の中に飾ってあるいくつかのチベット仏教にちなんだデザイン画も彼の作品だそうで、青年はこのような僻地で会うことは珍しい芸術家肌の人間のようなのだ。あなたはどこの土地の人なの？あなたの名前は？何故この土地に来たの？

彼は私の質問に口頭では答えようとはせずに、いちいち私の手帳を取り上げては書き記していった。

- ・我的家：雲南省 麗江 瀘沽湖(摩梭人)
- ・我的名字：給真二車(ゲイティン・アールチャー)
- ・我来四川亜丁的理由：

- 1、高い山が好きだから
- 2、骨董を集めるのが好きだから
- 3、旅が好きだから
- 4、生存

彼はチベット民族では無いそうで、主に雲南省に居住地を定める摩梭人(モーソー人)という民族の人間なのだそう。彼の話では亜丁は生活の為に滞在しているがこの村の人間とはあまり馴染んでいないようだった。

「そういえば、君はカメラを持ってないのか？」

暫く話しているうちに青年がふと私に尋ねた。

「私のカメラはこれだから」

私が自分の目を指差して見せると、青年はハッとされた様子で言った。

「どうやら君はオレと同じ種類の人間らしい」

だが私は内心、今回程カメラを持っていなかったことを悔いていた旅はなかった。

これまで何度か一人で旅行はしたが、風景写真などはいざ知らず、これ程多くの友人との出会いと別れを繰り返した旅は初めてだ。人の記憶はいつしか薄れてしまうものだし、この旅行記を記している今となっては、すっかりおぼろげになってしまった友人達の顔を再び眺めたいとつくづく思う。しかし、この一件により彼の私に対する評価はにわかにながったようだった。

「実はオレはガイドもするんだ。もし君が望むなら世界で最も美しい場所の一つである雲南省の麗江、瀘沽湖に案内するが、一緒にいかないか？」

なんて魅惑的なお誘いだらう・・・熱心な誘い文句には心を動かされたし、時間とお金が出すものならこのまま彼にヒョコヒョコ着いて行って、世界で最も美しい場所の一つへ訪れて見たいものだが、残念な事に時間もお金にもそれ程余裕が無かったし、どうもこれは新手のナンパなのではないかという気も始めて、そろそろ彼の店からはおいとますることにした。

来る者は拒まず、去る者は追わず、泰然自若といった雰囲気の人に別れを告げると、今度はその向かい側にある、村で一軒だけと見られる雑貨屋に入った。店の中には飲料水とお菓子とほんの少しの生活雑貨、その他にホコリにまみれた洋服や帽子などが数点と写真集の様なものが置いてあった。私は旅の消耗品であるトイレットペーパーとコーラを買った。

目的は買い物では無く暇つぶしなので、コーラを飲みながら雑貨屋の商品を眺め店の主人と話していると、突然店の親父が言った

「君の歳はいくつなんだ!？」

「は・・・?」(何故雑貨屋の親父にこんな事聞かれなきゃならないの?)

「何でこんな所を女一人でフラフラしてる!？」

「は・・・?」(旅行なんだけど)

「あんたは見たところもう30にはなっているだろう。何故結婚して落ち着かない!？」「この村の女にお前のような事してる奴はいない。大人になったら結婚して子供を生み、家族を作って生活するもんだ!!いつまでもそんな事していて、歳を取ったら誰がお前の面倒を見てくれる?」

どうも話の雲行きからすると、私は雑貨屋の親父にお説教されているらしかった。雑貨屋の店主にとっては私のような女が明確な目的も無く一人で外国を旅しているなんてこと自体が許しがたいらしい。勝手に30過ぎの独身女だと決め付けられているが、僻村の雑貨屋で思いがけず投げ付けられた店の親父の言葉は私の胸に強く刺さるものがあった。いくら歳を重ねても、どこか地に足の着かない感覚をずっと抱え持ったまま生きている私は、いつだってこのように大地にがっしりと足を付けて生活を営んでいる人達に対する劣等感のようなものを心の奥底に抱え持っていたのだ。

これが日本人の年配者から言われたものなら、まだ「あなたは私とは考え方が別だから・・・」などと冷笑を返す事もできたらう。だがこのような中国の山奥の僻村で、故郷に根を張って暮らす生粋の生活者のような村人からそのような言葉を言われると、もう返す言葉も見つからず、「はい。仰るとおりです」と頭を下げたいような気持ちになってしまうのだ。思わず虚を突かれ一本取られた感じの私だったが、親父の次の言葉には思わずムツとしながら苦笑してしまった。

「お前も早く国に帰って結婚しろ!!この村じゃ30過ぎた女なんて誰も要らないぞ!」

確かめもせずに勝手に独身者だと決め付けられているし、余計なお世話である。その時、村の子供が店にコーラを買いに来た。「3元だ」店の親父の言葉に子供がお金を払って出て行くと、私は親父に反撃した。

「ちょっと～!!さっき私が出した時は5元だったじゃない!!」

親父は苦笑いしながらも胸を張って言った。

「お前は外国人だからな。こんな旅行がしてられる金持ちなんだから当然だろう?」

亜丁村の雑貨屋の親父との勝負は、どうやら私の完敗なのだった。

